

誠実さの先にたどり着くところ

「過去でしょ！！」—また自分を叱っている。間違えたところが赤ペンでチェックされ、さらにこの言葉が強めにくっきり赤字で添えられている。過去形を見逃してしまった自分が許せないのだろう。自分で丸付けをしたAちゃんのKeyワークはほとんどミスがないのだが、ほんの数カ所のミスをしてしまった箇所には、自分を叱る言葉がくやしさとともに顔を出す。

Keyワークは塾の自習用英語ワークである。毎月の月例テストの際、範囲のページを各自でやって、その後答えを見ながら丸付けまでして提出する。もちろん内容を総ざらいして自分ができない問題を見つけ、勉強し直す、という単元内容の理解を深めることが第一目的であるが、塾としてこれを宿題にするのにはもう一つの目的がある。自学の練習である。当塾の通常の宿題はプリントにしるワークにしる、出されたら次の授業日には提出しなければならない。大量というわけではないから次の授業日まで手をつけなかったとしても、当日大急ぎでやれば間に合うのである。いい加減にやって私から叱責されることもあるが、滅多に未提出にはならない。ところがこのKeyワークはそうはいかない。1ヶ月分の範囲であるから、20ページくらいある。当日にやっていたのでは間に合わないのである。月のほぼ始めに範囲を伝えるため、計画的に進めれば余裕でこなすことができるはずなのだが、そうはいかないのがほとんどの人間である。時間がなくなり“やっつけ”でやっている塾生の何と多いことか。ワークはうめても「まだ丸付けができていません。」と言ってくる塾生や、適当な丸付けで間違えていても丸にしている塾生、答えを写しているであろう塾生が毎月出る。これではやる意味がない。これを改善させ、計画的に深く勉強するような取り組み方を見につけさせたいというのがもう一つの目的である。

Aちゃんは目の前の問題に対して誠実だった。そして素直だった。きちんと向き合い、どれだけ時間がかかろうとも一つ一つ納得できるまで考え抜いて答えを出す。塾で教わった解き方をどんな細かいところも変えずに使う。「ここはやれる子はやっておいたほうがいいよ。」という私のアドバイスも聞き入れて全て実行する。問題を間違えればどこで間違えたのか原因を見つけ出し、二度と同じ間違いをしないよう自分自身に言い聞かせる。一伸びないわけがない。

彼女が学校の定期テストでほぼ満点という驚くべき点数を取ってきたとき、「どんな勉強をしたの？」と尋ねたことがある。彼女の答えは「学校の物と塾でやったワークとプリントだけです。」だった。何でも万能にできる子ではない。数学の文章題には苦手意識を持っている。それでも誠実に向き合い一つ一つ超えていけばここまで到達できるということを教えてくれたのだ。